

口腔の役割

入れ歯のロバ

今から半世紀前、東京に石上健次先生という有名な歯科医師がいました。名医と言われた理由は、昭和天皇の御殿医(ごてんい)を務められていただけでなく、世界で初めてロバに入れ歯を作ったからです。

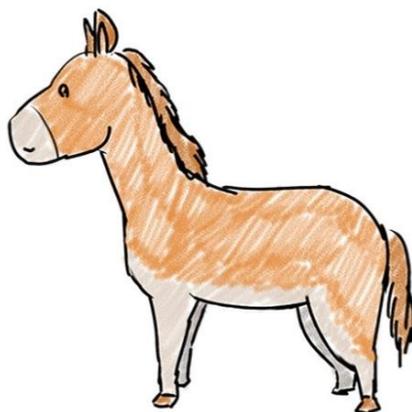
このロバの名前は“一文字号”。1935年、北京の郊外で生まれ、日本軍の物資の輸送で活躍し、6歳になった1941年に上野動物園に送られてきました。当時、上野動物園で子供たちを乗せた馬車を引き、大変な人気者だったそうです。ところが1962年のある日、ポップコーンを喉に詰まらせて、あやうく死んでしまうところだったそうです。その時一文字号は27歳、人間で言えば80歳過ぎの高齢者です。

喉に詰めた原因、それは歯が悪かったことでした。以来、すっかり食事をしなくなり、痩せ細ってしまったこのロバを、何とかもう一度噛めるようにしてやりたいと思い、上野動物園の人々は、東京中の歯科医や歯科大学に連絡し、ロバの入れ歯を作ってくれる歯科医を捜し、やっとのことでこの石上先生が引き受けてくれることになりました。

当時、石上先生はロバの入れ歯を作るにあたり、人間と違い、しゃべることの出来ないロバの歯型をとり、入れ歯の高さを決める事は、大変な苦労があったと言っています。やっとのことで完成したこの入れ歯。はたしてロバが入れ歯を入れてくれるのだろうか？・・・多くの人々が見つめる中、そんな心配はよそに、一文字号の口に入れ歯が入ると、しっかり草を食べ始め、元気を取りし、誰もが喜んだそうです。

痩せ細っていた体が元に戻っただけでなく、元気も出てきたということは、咀嚼(そしゃく)することを取り戻したことにより、脳が活性化されたことにほかなりません。

入れ歯のロバのこの物語は、たとえ歯が抜けても、入れ歯を作るなどの歯科治療は、脳を刺激し、活性化させる治療であることがとても良くわかるエピソードです。



<引用・参考文献>

著者 市来英雄・松元裕子「ロバに入れ歯を贈った歯医者さん」クインテッセンス出版(株)(1999)

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

